

院政期一貴族の信仰生活

堅田修

序

平安時代後期、院政期の文化といえは、院政の主による法勝寺をはじめとする六勝寺、鳥羽離宮内の成菩提院、得長寿院等の建立、『今昔物語集』などの説話文学、『信貴山縁起絵巻』、『伴大納言絵詞』等の絵巻物の隆盛等々が挙げられるであろうが、いま一つ注意されるのは、阿弥陀堂造立の流行である。阿弥陀堂は源信の浄土教興起以降、道長の法成寺無量寿院をはじめとして次々と造建されたが、院政期に至ると摂関家や源氏以外の、中流貴族、即ち受領として勢力を得て院の近臣となった人々、さらに貴族的武士層まで相競って、しかも京のみでなく地方諸国にも造営されたのである。いま、文献並びに遺構によって、白河院政期

以降、後白河院政期に至る間に造立された阿弥陀堂を数えると、九体阿弥陀堂を含め、八十六宇を挙げうる。^①これ程数多くの仏堂の造立ということは、事新らしく論ずるまでもないことではあるが、一時代の文化現象として改めて留意されることである。一体、このような阿弥陀堂の盛行をなさしめた精神的、歴史的背景は何であったか。この点について既に論ぜられてもおり、末法思想が基盤をなしているといわれている。即ち、律令的社会秩序が崩壊し、武士の興起にともなう社会不安、僧兵の跋扈等、貴族階級にとって末法の世さながらの現実に対し、無常の現世に極楽浄土の幻想を享受しようとする頹廢的な心理が働いていたとい^②う。一般的事情としては正しくそのようであつたらうが、いま、さらに究明したいのは、阿弥陀堂造営者各人の信仰

の内実についてである。末法意識というが、それは阿弥陀堂造営者その人において、具体的にどの様にいだかれていたのであろうか。阿弥陀堂建立の具体的な意趣は何であったか。この様な観点から、ここでは院政期に相ついで三宇もの阿弥陀堂を造立した一貴族、藤原宗忠をとりあげ、その造立事情、そして彼の信仰の内実をさぐってみることにしたい。

一

藤原宗忠は、道長の二男頼宗の曾孫で、祖父は右大臣俊家、父は権大納言宗俊である。康平五年に生れ、承保元年十三歳で叙爵、康和元年三十八歳で公卿に列せられてのち、白河、堀河、鳥羽、崇徳の四朝にわたり、在朝六十五年に及び、恪勤精励、朝務に練達、ことに白河、堀河二帝の信任をうけて常に政務の諮問に預り、累進して右大臣まで昇った。その住居の地名から、中御門右大臣と称せられたが、学を好み詩文の才をもち音律にも達し、『韻華集』廿卷、『白律韻』十卷を編纂、また『作文大体』を撰述している。非常な精力家であったとみえて、寛治元年廿六歳から日々の見解を記し始めてのち、保延四年七十七歳で出家するまで実に五十二年間に亘る膨大な日記、『中右記』

を残していることはよく知られているところであろう。いま、この『中右記』をもつばらよりどころとして彼の信仰生活を伺っていくこととしたいが、先ず、同記にあらわれる宗忠の造寺造仏をはじめとする仏事作善をあとづけてみることにしよう。^③

造寺造仏について年次を追って、その主要なものをみていくと、先ず、

- (1) 父宗俊が丈六阿弥陀像の造立を発願しながら完成しえずして、永長二年五月五日薨去したので、宗忠が遺志を継いで、日野法界寺の阿弥陀仏像の相好を模して造像し翌承徳二年三月廿五日、一条東洞院にある一条本尊堂の北に、一間四面の小堂を建立、安置した。(一条小堂)。
- (2) のち永久五年六月廿五日、右の一条小堂を壊って日野奥院、即ち法界寺の奥に移し、前年永久四年十二月九日逝去した宗忠の第五女の墓上に建てなおし供養した。この堂の本尊として半丈六弥勒仏像を安置した。(奥院弥勒堂)。(もとの一条小堂時代の父宗俊発願、宗忠造立の丈六阿弥陀像は、後に新堂を建て奉安することとなる。)
- (3) 元永二年六月廿七日、一条本尊堂を日野本堂(薬師堂)の北に移し、三間四面の二階堂として改造建立し(上棟)、十一年後の大治五年六月廿四日に至って供養が行なわれ

た。この一条本尊堂は、もと宗忠の祖父俊家が大宮殿寢殿を仏堂となしたもので、その本尊として宗忠の父宗俊が、永保三年七月廿七日造立したが、宗俊は其の後大宮殿を美濃守公俊の一条地と交換して、一条東洞院地に移建したものであった。(二階堂、日野新阿弥陀堂)。この日野二階堂に安置の阿弥陀像は、既に、宗俊造立の一条本堂の本尊としての丈六仏があり、さらに宗俊発願、宗忠造立の一条小堂の丈六仏が存したわけであるが、宗忠はその上に、大治四年十月五日、恐らく中尊とすべく周丈六阿弥陀仏を、奈良仏師康助によって作り始め、同五年三月廿五日奉安した。従って二階堂には、三体の阿弥陀仏像が並置されたわけである。

(4) 保安元年八月廿二日、日野奥院弥勒堂の前に、塔婆を建立、釈迦、多宝二仏を安置、供養した。

(5) 保延三年七月廿日、日野法界寺中に、三間四面の小堂を建立、故尼上(宗忠室と思われる)が存生の時に造立した半丈六阿弥陀仏像を安置した。

宗忠の造寺造塔の主要のものは以上の如く知られるが、要約すれば、阿弥陀堂として、一条小堂、日野二階堂(新阿弥陀堂)、日野半丈六堂の三宇、弥勒堂一宇(一条小堂移建)、さらに塔一基を造建したのであり、これら堂塔に

関連する仏像として丈六阿弥陀像を、一条小堂の本尊、二階堂の中尊の二軀、塔安置の釈迦、多宝如来像各一軀を造立したわけである。さらに造仏については、右の堂塔に関連するものの他に、数多く見られる。承徳二年九月七日には、家中に病人が出たため、等身薬師像並びに三尺不動尊像を作り始め、康和五年六月廿四日には、二尺の弥勒仏像を造立しており、天仁元年七月十九日には先帝堀河院御息災のため三尺聖観音像を造立供養、同年八月十三日には、家中の小講演に当り、等身金色釈迦像を造立、元永元年九月廿四日、女房胸病により薬師仏を造らしめている。大治二年七月十四日には、日野上座隆助によって、二尺五寸の地藏菩薩像を後世菩提のため造り始められており、保延元年十一月廿五日には、夢告によって等身不動尊を作り始め、同二年八月廿五日、宗忠の妻と見られる尼上の五七日に当り、等身釈迦三尊を造立しているなどである。

以上の堂塔、仏像の造立のほか、宗忠は種々の仏事作善を行なっている。永統的に行なっているものから挙げていくと、早くからみられるものとして毎年二月廿五日の念誦がある。これは、寛治二年正月十一日に、「参北野、心中所立之願、毎年二月廿五日、心経百卷、金剛般若経一卷、寿量品一品自奉転読、但有限公事之障時追可奉読也」とい

うことからすれば、菅原道真の天神に対する信仰としてなされたもので、四十五年後の長承二年二月廿五日にも、「精進小念誦、年来之勤也」とあるから、廿六歳で発願以来、毎年続けていたものといえる。次に吉日に念誦することがある。寛治八年正月十日、「今日依当吉日、始炎魔天念誦、金剛般若經一卷、心經五十卷、提婆品一卷、炎魔天真言二千遍、地藏菩薩真言五百遍也、四季各一日春正月、夏五月、秋九月、冬一月、限以永年、心中所祈請申也」とあるが、以後しばしばみられるから、続けて永年実修したものといえる。次に本命日における念誦がある。寛治八年五月二日ほか『中右記』の随所に見えるが、例えば、長承元年三月十一日条には、「依為本命日終日、精進奉念北斗呪」とあり、また同年十二月十六日条に、「本命日念誦勤了、每迎壬寅日、精進念北斗」と見え、陰陽道からきた本命星の信仰によって、壬寅の日に本命供として北斗呪を誦していたわけである。特に保安元年七月四日条には、「依為本命日、念北斗呪本属星、当年星呪如年来」とあり、また同年十月朔日条にも、「子依為五十九当年星也、籠居日野之間、於薬師堂令祈請」とあり、同年は当年星の年を意識して勤められている。次に毎日常修の作善として、阿弥陀真言念誦のことがある。康和五年五月四日には、「従今日限永年、阿弥陀小呪千遍、光

明真言百遍、付瀧慶阿闍梨、毎日令祈念、是偏為臨終正念往生極楽也」とある。阿弥陀小呪祈念のことは、これに先立ち、承徳元年十二月十四日に、「阿弥陀小咒一百遍毎日可奉祈念由、従今日云付実円闍梨了、是偏為臨終正念往生極楽也」とあり、早くより行っていたわけである。

毎年実修の作善としては、ほかに父母の祥月命日に當つての追善供養がなされている。先ず、永長二年に薨じた父宗俊の忌日、五月五日、また延久元年に亡くなった母の忌日、八月四日には、それぞれ経供養が営まれている。例えば、承徳元年八月四日には、「依当先妃遠忌、仏経布施物等送日野観音堂了、従今年於件堂可修也」とあり、以前は恐らく一条本堂で勤修されていたのを、日野観音堂で修することとなり、さらに大治五年、日野に二階堂の新阿弥陀堂が建立されてからは、「今日依遠忌、送経布施日野、雑(新カ)堂新仏前供養」とある。父宗俊の忌日には、例えば、永久二年五月五日、「依大納言殿御忌日、向一条堂、供養仏経」とある如く、例年一条堂で勤められていたが、元永元年、一条堂を解体、日野へ移建後は、「今日遠忌也、仍晚頭入日野、相具人々経五申、於阿弥陀堂、以僧六人供養、一条堂未立之間、彼仏誓安置阿弥陀堂、於其仏前奉供養也」という如く、日野で行なわれている。忌日の供養と

しては、ほかに外祖母七条尼公の忌日、八月廿二日、祖母一条尼上の三月十三日、宗忠第五女の十二月九日、尼上の七月廿八日等に行なわれている。

上述のほか、尚隨時、種々の仏事が修されている。その主要のものを掲げると、天仁元年八月十三日から六日間、中御門邸内において講説が行なわれている。『中右記』には、その勤修事情が詳しく記されているが、その趣意は「過去二親一切衆生為滅罪生善也、但又先以功德上分奉資先帝聖靈、朝恩之深不知所報之故也」といっており、説法論議を聞いて宗忠は、「誠足随喜」と感激している。次に大治五年五月廿四日には、家中で地藏講を営んでいる。これは前述した如く、大治二年七月十四日に作り始められた二尺五寸の地藏菩薩像が完成し、地藏菩薩の縁日に催されたわけである。次に、長承三年七十三歳の晩年に及んで、逆修善根を修している。即ち十二月十五日から七日間、等身木像阿弥陀仏や迎接曼荼羅、如意輪觀音繪像、地藏菩薩、虚空藏菩薩、釈迦三尊繪像、ほかに法華經、色紙經をそれぞれ供養、講説を行なっている。宗忠は結願して、「今生之大願無事障遂了、生中之大慶也」と随喜している。また家族の病気に当っては、承徳元年九月二日から十五日の間、清水寺の僧侶に千手經を転読させ、あるいは丈六千手觀音

繪像、阿弥陀三尊繪像、等身藥師像、三尺不動尊像、丈六千手觀音像、六足尊、降三世繪像等を供養、冥道供、千手法を修させている。また五十九歳の保安元年九月十九日死亡した西の方の葬送に当り、廿二日から廿九日まで、日野法界寺に籠居の間、「朝聞法花懺法、自滅六根之罪障、夕唱弥陀念仏、偏祈九品之往生」という生活も送っている。その他、この時代流行の熊野詣も行なっている。即ち、四十七歳の天仁二年十月十八日以前、恐らく十二日に出發し、十一月十日に帰洛しているが、十月廿六日、本社証誠殿の宝前に額き、廿歳の時から二度企図したが果さず、廿八年後の今日漸く參詣の大望を果したとして、「落涙難抑、随喜感悦」と感慨をのべている。このほか、諸々の寺々に參詣しているが、法勝寺、尊勝寺、円宗寺等の八講、三十講、最勝会、興福寺の維摩会等の法会は、いわば公的であるから別として、例えば、雲林院の菩提講や、嵯峨の法輪寺に詣でたり、あるいは、雲居寺極樂堂や、橘家光室の臥見堂、小野良雅阿闍梨の迎接堂等に參詣していることは、彼の信仰を知る上で留意してよい。

二

上来、宗忠の造寺造仏、仏事作善の大概を見てきたが、

これらを通じ、彼の信仰を考察することとしよう。

先ず三棟もの阿弥陀堂を建立したことについてみると、一条小堂の建立事情は先に略述したが、その願趣は、「尊親納言殿下為滅罪生善、此廿余年來造立丈六阿弥陀如来像、未終其功、去五月重病時教命云、汝早造立此像、一周忌中可奉供養、(中略)但一条本尊堂傍又建立小堂、必可奉供養者、其後尊親遂以遷化他界、予深奉此語、從去年冬抛方事、本堂北立一間四面小堂、安置彼丈六仏」といっている。さらに供養に当って、「誠是依世々生々宿縁果此大願也、非啻答尊親往日之願力、兼亦遂弟子多年之宿望也、事与心相叶、思興願不違、隨喜之落涙不知所抑者歟」と感激にむせている。要するに、一周忌までに父の所願を達成することによって菩提を弔い、また自己の滅罪生善を期するということであつたといえよう。

大治五年六月四日供養された日野二階堂即ち新阿弥陀堂は、前述の如く、一条本堂を移建、改築したものであつたが、日野には早くから日野氏によって諸堂が建立されてきた。先ず資業によつて永承の頃、薬師堂が創建され、その子実綱は永保の頃、観音堂を、実政は五大堂をそれぞれ建て、また宗忠が一条小堂の丈六阿弥陀像造立に当つて模本とした丈六阿弥陀像を安置した阿弥陀堂があり、本丈六

堂、奥阿弥陀堂とよばれていた。さらに藤原知信が南辺に一室を建てている。知信は資業の女の孫という縁によつて日野の地を選んだのであろうが、宗忠の日野における堂塔造立も、彼の母が実綱の女という姻戚関係により、知信の例になつたものであろう。二階堂の新阿弥陀堂について、宗忠は、「偏是悲母幽靈往生極樂也、兼又為一切衆生離苦得道也」といっている。彼の母は、延久元年八歳の時に逝去しており、元永元年が卒後五十年になる。新阿弥陀堂の造建は、元永二年六月廿七日条に、「午刻上新堂棟、給小祿於工、先年雖上借棟、経一兩年畢」とあるから、元永元年頃着工していることになる。従つて、亡母の五十回忌を期して、その往生極樂のため新阿弥陀堂の造営を企図したものであろう。完成供養は十二年後の大治五年であるが、亡母の里元である日野家由縁の法界寺に母の追善のため建てたということである。

宗忠のいま一つの阿弥陀堂は、保延三年七月廿日に、彼の内室とみられる尼上の一周忌に当り、尼上存生中に造立していた半丈六阿弥陀仏を奉安すべく、日野法界寺中に建てたもので、先的一条小堂と同様に一周忌に造立していることは、亡妻の菩提を弔う意趣であつたといえよう。上述の三棟の阿弥陀堂は、何れも故人の追善のために造建され

たものといいうるが、このような追善のための阿弥陀堂は当代に多くみられるところで、例えば、先の藤原知信の日野丈六堂、藤原頼頼九体堂、浄土寺辺の平範家堂等何れも亡父母のためであり、醍醐無量光院、六条殿御堂は郁芳門院、仁和寺転輪院は女御茨子、源親元醍醐往生院は養君三位殿のため等である。宗忠に限らず、多くが死者追福のため造立されたのであるが、これは、奈良朝以来の追善的弥陀信仰の伝統によるとともに、観想念仏の貴族社会における新しい変質であり、観想念仏的な願生思想を媒介として、追善思想にも強い作善の意識と、奢侈的な利那主義・享楽主義が交錯してきたのであると説かれている。宗忠においても同様な宗教意識であったのであろうか。確かに院政の主においては、論ぜられる如く滅びを諦観した利那的類魔的な享楽主義、若くは財を傾けて功德の限りを尽そうという功德主義が支配していたということはできようが、宗忠の場合、単に利那主義、享楽主義と論じきれないように思われる。彼は新阿弥陀堂の造建については、非常に苦心しているのであって、大治二年三月三日には、「棟上之後已及九ヶ年万事不叶、干今延引也」と慨いており、それは、保安元年六月五日条に、「今日終日在日野、營々造作事、宗成任因幡、去任之後諸事難叶也」とある如く、二男宗成の去

任による経済的問題によるものであった。そして十一年の歳月をかけ漸く完成させているのであり、必ずしも、ありあまる財を傾けての享楽主義的なものではなかったと考えられる。また、堂内の荘厳にしても、大工・銅鍛冶・壁工・漆工等の工人の名は見られるが、絵師の名は見られないことからはすれば、例えば平等院に見る如き荘厳な観想的浄土変は存在しなかったと考えられ、現世に極楽浄土の幻想を享受しようという如き利那主義的なものでなかったと思われる。宗忠にとって阿弥陀堂は、何よりも先ず二親あるいは亡妻の追福、ひたすら極楽往生を願うての真摯なものであったといえる。この点さらにより深く彼の信仰の内実を伺うために、阿弥陀堂造立以外の仏事作善についてみることにしよう。

三

中右記を通じてみると先ず留意されるのは、宗忠が極楽往生を願い、あるいは極楽往生にかかわる行業をなしていることである。即ち、卅七歳の承徳二年五月一日には、当時盛行していた雲林院の菩提講に、一条尼上並びに寝殿御方とともに参詣、結縁している。菩提講は、極楽往生を求めるために法華経を講説する法会で、迎講なども催して

いたようで、雲林院のほか六波羅蜜寺等でも行なわれていたものである。宗忠は、雲林院に詣で、その状況を詳しく記している。即ち、「始説法之間誠以隨喜、已時許事了、堂中竝座老少男女称南無声遍滿如雷、此講筵者故源信僧都為結縁所被始行也、其後無縁聖人行来日久、或有夢想告行此講筵、或發菩提心来此堂舎、如此間法会之趣隨及末代称以繁昌歟、予竹馬時隨外祖母參詣此堂以来、漸及廿余年、今初結縁了」とある。菩提講始行の由緒についても述べており、若年時より多大の関心を懷いて結縁を願っていたのがかない随喜しているのである。次に前節に掲げたところであるが、三十六歳の承徳元年十二月十四日には、阿弥陀小呪一百遍を、さらに、四十二歳の康和五年五月四日には、阿弥陀小呪千遍、光明真言百遍を永年にわたり祈念せしめているが、それは、「是偏為臨終正念往生極楽也」といっている。また、元永元年閏九月十八日には、雲居寺に参詣して瞻西聖人に謁し、金色八丈の阿弥陀像をまつる極楽堂に入り、「誠以神妙也、往生之業自然相催、終日念仏」しているのである。さらに、元永二年六月廿八日には、橘家光妻の造営した臥見堂の迎接像、また保安元年四月二日には、小野良雅阿闍梨の迎接堂を拜し随喜している。晩年七十一歳の長承元年十月十五日には、宇治の阿弥陀堂にお

いて『往生要集』の「十楽式」を談ずるを聞き、自ら九品の縁を結んだとして至心に随喜し、また出家の前々年、七十五歳の保延二年三月十七日には、曉夢に往生要集十楽文を見て、「是近日口誦往生要文心銘之所致歟」とまた随喜している。そして、長承三年閏十二月六日には、心中に、「願我散乱心一称阿弥陀、臨終於来迎、往生極楽国界」の文を作り、口に数返相誦したが、その夜、大伽藍を作り供養を営む夢を見て、「定知功德成就歟」と喜んでいる。五十九歳の保安元年二月十二日には、三井寺の慶禪から、法成寺上座法橋隆尊、及び静暹阿闍梨という二人の破戒無慙の僧が、念仏に帰して往生を遂げたという往生伝をきき「思是弥陀之本願不棄重罪人也、依之有往生志人只可修念仏也者、(中略)誠雖臨末法、仏日未滅歟」といっている。死の五年前、七十五歳の保延二年三月十八日には、比叡山の兼豪聖人が、日吉大社御前で、「往生人は内大臣(宗忠)也」という夢を見たとき、「落涙難抑、今生大望只在此事、随喜感歎不知所謝」と正に感涙にむせんでいるのである。宗忠において極楽往生がいかに心から願われていたか伺い知られる。同年七月十一日には、中御門邸の寝殿南庇の西に、迎接曼荼羅を懸け、それに向って「居行」している夢を見て、「定知往生相歟」と心中随喜している。三月

十八日の往生人という夢想を聞いて安心立命した如くである。

上述の如き宗忠の行業を見てくると、彼は若年の頃から極楽往生を強く願っており、老年に及び一層深くなり、「今生大望只在此事」といつている如く、極楽往生が彼の生涯における信仰の中心をなしているとみることができ、正に熱烈な浄土願生者であったといえるが、しかしながら、さらに彼の修善を見ていくと、前述の一条本堂の傍に建てられ、丈六阿弥陀像を安置した小堂は、十九年後の永久五年六月廿五日に至って、日野法界寺に移され、永久四年十二月九日死去した彼の五女の墓上に、菩提を弔う為に建て直したが、本尊は阿弥陀像に替えて半丈六弥勒仏像を奉安、奥院弥勒堂と称されるに至ったのである。そして永久五年六月廿五日、雲居寺の瞻西聖人を導師として供養がなされた^⑩。その後、この弥勒堂で元永元年十二月九日、弥勒絵像を供養して、五女の遠忌を行なっている。阿弥陀堂変じて弥勒堂となったわけであるが、弥勒に対する信仰は、『中右記』を通じてかなり強く認められる。例えば、承徳元年九月五日、宗忠の叔父に当る新宰相中将宗通が、夢で宗忠の父であった話をきき、「予聞此夢、情思事情、若是欲生天上之中有位歟、(中略)又図絵弥勒慈尊之像廻向、

兜率天上生之業也」とのべている。先の亡五女のための弥勒堂の造立といい、この亡父のための弥勒像廻向といい、追善的弥勒上生信仰をはっきり示しているといえる。しかし宗忠は、さらに加えて弥勒下生信仰も併せいでいている。例えば、承徳二年六月廿五日、明範阿闍梨を囑請し、三尺釈迦如来像一軀、法華経一部、金泥提婆品を供養した時、「功德所及奉導二親共生慈尊出世之時、必逢妙法演説之日凡弃勝他名聞之事、長為滅罪生善之言」と心中に願っている。また、康和五年六月廿四日には、二尺の弥勒仏像を造立、法華経一部を書写し、「是与過去雙親、為值遇慈尊出世之時法華演説之庭也」として、斎尊律師を囑して供養している。さらに、長治元年十月四日にも、吉日により小僧を招ぎ経供養し、慈尊出世に値遇せんことを願っている。嘉祥二年九月十七日、先帝堀河天皇のために慈尊弥勒像を図絵し、法華経、八名経等を書写、覺誓得業を囑請して供養したが、願趣は「慈尊出世之時、法華演説之庭、与先帝聖靈相共必奉值遇、且聽聞説法、且奉見龍顔、思出昔之願力以隨喜」といつている。翌朝、先帝の夢を見て、弥勒に祈請した願力が叶い、三会の暁に至らずして五更の夢において先帝にあいえたとして、「経王之功德不空者歟」と感激している。さらにまた、元永元年閏九月廿七日、笠置山

の弥勒石像に参り、「先帝聖靈、過去雙親、所生五女、共生慈尊出世之時、皆逢法華演說之日、遂知今日之願互成歡喜之心、又今日相具所参詣、初従妻子奴婢、及于田夫牛馬皆逢三會之暁、悉結一乘之縁」と祈念しているのである。

また、大治五年五月廿五日には、「修仏間心中所思、我守汝等、依今生結縁力、逢慈尊出世三會暁者」との夢想を得、前夜地藏講を営んだ功德かと随喜している。

このように下生信仰をかなり強くみせているが、この下生信仰とは、改めて論ずるまでもなく、仏滅後五十六億七千万年にして弥勒が兜率天から下生して行なう三會の説法に値遇し成道せんとするものであるが、わが国では院政期に至って貴族間ではなお上生信仰が存していたのに対し、民間において新たに發展し来たものだといわれている^④。

そして、これが院政期民間において發達するのは、末法思想の影響によるとされている。即ち、古代的秩序崩壊の中におきる対立混乱を、末法到来と身近かに感じ、阿弥陀淨土の願望の一方、末世を救うべき当来仏たる弥勒の下生を求めた信仰が展開してきたのであるという。そのようであるならば、院政期の貴族間には、なお弥勒上生信仰が一般的に認められるのに、宗忠に特に下生信仰が強く出ているのは、彼においては民間にけると同様に、末法到来の意

識が強かったということであろうか。事実、『中右記』には、天仁元年三月卅日、叡山の大衆下山による京中の騒動を見て、「仏法王法破滅之時歟」といっており、また、四月二日には、「凡末代法、衆徒所為、人力不可及也、弥及末世者、定滅亡朝家歟、可恐可慎也」ともいっている。強く末法を意識していたといえるが、しかしそれは既に指摘されているように、「政治及び宗教界に於ける貴族階級の支配権と之に対応する秩序及価値体系との危機を意味するにとどまる^⑤」ものであった。もっとも彼の末法意識がその程度であったとしても、「かかる階級的危機の体験を媒介として更に深く人間存在そのものの危機をも把握することができた^⑥」かもしれない。しかし、宗忠の末法意識が本当に自己の罪惡觀、後世への恐怖觀と結びついていたか疑問である。宗忠の下生信仰は、前述したところに見られる如く、法華演說の庭に値遇することを願っているのであるが、それは自己が弥勒下生に際し參會値遇することを願うというより、先帝堀河院尊靈、あるいは過去の雙親、及び自分の女が対象である。従って多分に追善的であり、兜率天上生と差程変らない意味で三會値遇を願っていると思われる。末法意識から弥勒下生を求めるといふより、先人の菩提を弔う追善的意識が強かったと考えられる。宗忠にと

つては、極楽往生が最大の願いであり、そのためにあらゆる諸行がなされる。その諸行の一つとして弥勒信仰がもたれるのであろう。即ち、撰関期貴族の信仰に見られた諸行往生思想が基盤をなしているといえる。諸行往生思想は、既に源信の『往生要集』にも示されている如く、念仏以外の余他の諸行もまた往生の助縁として行えば、往生は一層確實であるというわけで、造仏、写経を始めとして、戒行や諸功德の集積により滅罪修善、往生を遂げようとするものである。宗忠も、この諸行往生思想から諸行をなしたと考えられ、特に追善功德が重くうけとられ、阿弥陀堂造営も、弥勒信仰も追善に結びついている。追善により滅罪がなされ、それにより往生極楽が達せられるということであったと思われる。

四

宗忠において、往生極楽のための諸行として、前節でみた弥勒信仰のほか、なおいくつかの信仰が見られる。観音、地藏、虚空蔵等に対する信仰が抽出されるが、先ず観音に對しては、若年、廿八歳の寛治三年十二月六日、「今夕夢想可奉圖絵観音像之由、有其告、必可遂事也」と信仰をもち始めているが、寛治五年六月廿六日には、「夢奉念如意

輪咒有驗徳、是為本尊、自有感応敷」と次第に深められている。その後も大治五年七月廿四日、曉夢に、「如意輪観音小絵像奉見也、是自本我本尊也」といっているし、また元永元年閏九月九日にも、夢に千手観音廿八部衆を見て、「予自本以観音為本尊、仍有感応敷」といっており、観音を守本尊としていたことが知られる。その信仰の具体相は、例えば承徳二年九月四日及び八日に、家中不列人あるによって丈六千手観音像を供養し、また天仁元年七月十八日にも、小兒不例によって信永法師を招き、不空羂索観音像を供養せしめ、翌十九日には三尺聖観音像を明範阿闍梨を請じて供養している。十九日には、前年嘉承元年、先帝堀河天皇不予の時、息災を願って造立を始めたが、願叶わず晏駕し給うたので、一周忌に當って御菩提を弔うため供養したものである。以上、何れも病氣平癒を祈っており、現世利益的観音信仰といえるが、しかし一方では、寛治七年三月五日、清水寺の観音に詣で、「予九ケ日間去三日夜偏為臨終正念往生極楽、於観音宝前行千遍礼拜了」といっている。観音に一方では現世利益的信仰を捧げながら、他方では往生極楽を願うというのは錯雑した信仰といわねばならぬが、院政期には観音霊場に対して、現世利益希求よりも来世往生を願う傾向が顕著となってくると論ぜられて

いるが、それにしても宗忠の極楽往生の願いの深さをよく
 知ることができる。

次に地藏菩薩については、前節で述べた如く、大治二年七月十四日、日野康助上座によって二尺五寸の同像を作り始めている。そしてそれは、後世菩提のためとされている。大治五年五月廿四日には家中で地藏講を営んでいる。また、永久二年十二月廿五日には、少将二女子のために二尺五寸の地藏菩薩を信永法師をして供養せしめている。また、保安元年六月四日、遠忌のため女房によって等身地藏木像が供養され、湛秀已講の説法をきいて随喜している。また、保延元年六月十二日には、夢に三尺の地藏菩薩を見て、「定知此菩薩宿縁深」といっている。平安時代以降地藏信仰は、地獄観の深化にともない、墮地獄の危機を地藏に帰依して避け、そして罪深く地獄におちるべき身も西方に往生しようという阿弥陀との複合的信仰として拡がったといわれている。^⑤宗忠において地獄観がどれ程深かったか疑問であり、先地藏講を勤修した翌朝、弥勒の三会に値遇した夢を見、「夜前地藏講功德歟」といっており、雑駁な信仰であったといえる。これも諸行往生思想によって、諸功德の一つとしてなされた信仰といえよう。

往生極楽のためには、先述の如く、清水寺に詣で、観音

の宝前において千遍礼拝を行なう程であるが、また虚空蔵菩薩にも同様な願いを捧げている。即ち、承徳二年五月十九日には、後に三虚空蔵の二に数えられる嵯峨の法輪寺に参詣し、二つの願を立て祈るが、その一つは、「必臨終之時安住正念往生極楽、就中虚空蔵菩薩殊有臨終正念、願深信此事所往詣也」ということであった。そして、さらに、「抑往日少年之昔、度々参詣此堂舎、祈申才学之事、頗少分如相叶、於今者偏止現世之事、只祈往生之願、菩薩悲願必垂引誓」といっている。虚空蔵菩薩に対する信仰は、早く奈良時代から求聞持法が修せられている。求聞持法は、道慈によって請来されてから、神叡をはじめ吉野比蘇山寺の自然智宗の僧達によって修せられ、空海もこれを持ち、道昌にうけつがれている。法輪寺の虚空蔵は、『法輪寺縁起』^⑥によれば、道昌が空海の指示に従い求聞持法を修した時得られた霊像であるという。この虚空蔵に、臨終正念往生極楽を願うということは、何に根拠があるのか不明であるが、虚空蔵に対する修法には、求聞持法の他に、福德、知慧、音声を求めするための虚空蔵法、また、増益、息災を願う五大虚空蔵法がある。法輪寺虚空蔵も、同寺縁起に、「往詣参籠之人。本尊必満願望」とあるから、宗忠も所願である臨終正念往生極楽を、そのままに表出したもので

あろう。宗忠にとつては、極楽往生のための諸行の一つとしての虚空藏信仰であつたと考えられる。

以上、宗忠の往生のための諸行としての観音、地藏、虚空藏の諸菩薩に対する信仰の実態を見てきたが、長承三年十二月十五日から七日間に亘つて行つた逆修善根において、上述の諸仏をそれぞれ供養しているのである。即ち、初日の十五日には等身木像阿弥陀仏一体、十六日には迎接曼荼羅、十七日には弥勒絵像、十八日には如意輪観音絵像、十九日には地藏菩薩、廿日には虚空藏菩薩、結願の廿一日には釈迦三尊絵像を供養している。即ち、日頃尊信している諸仏諸菩薩を、逆修という重大仏事に當つてすべてまつて勤修したわけである。その尊崇の深さが知られよう。

宗忠の信仰で、いま一つあげたいのは、法華経を深く信じ持していることである。その崇信のことは、『中右記』に終始みられるところであるが、例えば、承徳二年五月十九日、先述した如く、嵯峨法輪寺に参詣した時、「生々世々在々処々得値遇法華経、身縦依先世業輪廻六道、深持法華雖一時不敢忘」と発願している。また、同年六月廿五日三尺の釈迦如来像に副えて法華経一部を供養し、「縦依先世之業暫生六道之中、於在々処々奉値遇此経、纔雖一念敢

不廢忘」と同様の願を立てている。また、長承元年十二月廿一日、逆修善根の結願に當つて、「生々世世奉値遇法華経之願啓白了」といっており、生涯、法華経の受持を期している。法華経は、既に奈良時代から滅罪、追善の經典として受持され、天台開立後は特に流行し、弥陀あるいは弥勒信仰とも密着し發展するのであるが、宗忠の場合、この経に「値遇」することを願っている。これは、「身縦依先世業二輪廻六道」といっていることからすれば、法華経護持することによって、墮地獄が避けられるという『法華験記』の説くところと同様の信仰から、法華経によって往生極楽を遂げようとするものであつたと考えられる。

上來、宗忠の造寺造仏をはじめ、諸種の仏事作善を通じて、彼の信仰の内実をさぐってきたが、要説すれば、彼においては極楽往生こそ、終生の最大の願いであり、その往生のために、あらゆる諸行が修されたのである。即ち、弥勒信仰をはじめ、観音、地藏、虚空藏の諸菩薩に対する信仰も、諸行往生思想によってなされたのである。三字の阿弥陀堂造立も、故人の追善にあり、その功德によって極楽往生を遂げようとするものであつた。一言でいえば、諸行往生思想による熱烈な浄土願生者であつたといえよう。これは、撰関期以来の貴族一般の信仰のあり方と通ずるもの

であるが、しかし、宗忠においては、院政期浄土教信仰の一般的傾向として論ぜられる如く、奢侈的な利那主義、享楽主義とみなすのは当たらないと考えられる。彼は誠に真摯な浄土願生者であった。もっとも、先節で挙げた如く、本命日や吉日、二月廿五日の念誦など種々の善業もなしており、錯雑した信仰を持ち併せてもいる。この点、さらに論究しなければならぬし、また、交渉した僧侶についても、さらにまた院政期という時代背景との関連、他の同時代貴族の信仰との比較など、考察しなければならぬ多くの問題を残しているが、紙幅も尽きたいまは、後稿にゆずることとしたい。

註

- ① 井上光貞『日本古代の国家と仏教』、村山修一『浄土教芸術と弥陀信仰』、杉山信三『院の御所と御堂』、『藤原氏の氏寺とその院家』などの諸氏の説を参照。
- ② 井上光貞『日本古代の国家と仏教』。
- ③ 本論文で挙げる宗忠の事績はすべて、『中右記』によるもので、特別に記すほかは、掲出の日付の条下の記載である。
- ④ 『中右記』の天仁元年条は、十月十八日以前を欠いているため、宗忠の熊野詣出発の日は不明であるが、例えば、元永元年九月の白河法皇の熊野詣の場合、京を出発して本宮に至るまで十四日間を要していることから考え、宗忠が本宮に到着した十

月廿六日から逆算して十月十二日と推定した。九十九王子をへて行く熊野詣の日程はそれほど違いないと考えられる。

- ⑤ 『中右記』大治五年六月廿四日条。
 - ⑥ 『中右記』元永元年八月四日条。
 - ⑦ 村山修一、前掲書。
 - ⑧ ⑤に同じ。
 - ⑨ 『栄花物語』巻十五、うたがひ。
 - ⑩ ⑤に同じ。
 - ⑪ 速水侑「日本古代社会における弥勒信仰の展開」(『南都仏教』16)。
 - ⑫ 家永三郎『日本思想史に於ける否定の論理の発達』
 - ⑬ 家永、前掲書。
 - ⑭ 速水侑『観音信仰』。
 - ⑮ 井上光貞『日本浄土教成立史の研究』。
 - ⑯ 『大日本仏教全書』寺誌叢書第一所収。
- (本学助教授、国史学)